

AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2017年 夏号

第8巻第2号（通算22号）

2017年7月31日発行

2017年度全国大会—新企画とAJEQのさらなる国際化—

丹羽 卓（金城学院大学）

2017年度の企画委員長を仰せつかりましたが、過去のことがよくわからないまま引き受けたため、年度当初から手探りで、色々な方からご教示いただき、右往左往しながらなんとか準備を進めています。そんな状態ではありますが、7月15日に持たれた理事会でプログラムのおおよそのところが決定されましたので、多数の方々の積極的な参加が得られればと願いつつ、それを紹介したいと思います。

今年度の大会は10月7日（土）に早稲田大学を会場にして開催されます。午前には自由論題の報告、午後には基調講演とシンポジウムという構成は昨年度同様ですが、本年度は昼休み後に、新しい試みとして、杉原賢彦会員と片山幹生会員による「ケベックの詩とポピュラー音楽」という企画（50分）を予定しています。他の学術的な報告などとは少し趣を異にする企画で、オーディオ・ヴィジュアルを駆使してケベックの音楽を

実際に聞きながら、詩と音楽を紹介する形になると聞いています。締めくくりには全員で合唱するという目論見もあり、それが実現すればAJEQ全国大会史上画期的なシーンを体験できるかもしれません。新企画の目的は、AJEQの活動の裾野を広げたいという立花会長はじめ理事会の意向を反映したものです。学会というと敷居が高いと感じる方々も少なからずあるでしょうが、こうした企画を通じて、できるだけ多くの人にケベックに関心を持ってもらえればと願っています。皆様も知人友人に声をかけ、この企画にだけでも参加するようお誘いいただければ幸いです。特に学生などでも参加しやすい企画となると思いますので、若い人たちを積極的にお招きいただければと願っています。

今回の全国大会にケベックからお招きするのは、ピエール・ヌヴー（Pierre Nepveu）モンREAL大学名誉教授で、「ケベック詩と

●本号の内容●

- 巻頭言（丹羽 卓）…1 ケベックのジャーナリズムとの出会い（松沼美穂）…3
出会いに支えられた研究滞在（関 未玲）…4 リレー連載「ケベックと私」第4回…6

『静かな革命』 (*La poésie québécoise et la Révolution tranquille*) 」と題する基調講演を行っていただきます。著名な詩人で評論家でもあるヌヴェー教授の講演は、「静かな革命」も扱われますので、文学研究者からだけでなく幅広い方面からの関心を集めることでしょう。この講演には真田桂子会員による通訳も付き、フランス語が分からない方にも聞いていただけるようになっていますので、ぜひ多方面にご紹介いただきたいと思います。

この基調講演を踏まえたシンポジウムは「世界文学から見た『静かな革命』」というタイトルのもと、4 人の報告者 (立花英裕会員、西成彦氏、荒木隆人会員、廣松勲会員) が立てられます。そこでは「世界文学」という興味深い理念が取り上げられ、報告者には文学研究者ばかりか、政治学の専門家も含まれていますので、多面的かつ学際的な報告と議論が展開されるものと大いに期待しています。

自由論題の時間には、関未玲会員による「キム・チュイ作品に見られる相対化されたオリエンタリズム」と Chun-Yi KUO 会員による「*Est-on arrivé à ce qui commence? — Analyse de la reprise stratégique des images dans le film Miron : un homme revenu d'en dehors du monde du réalisateur Simon Beaulieu*」、および ACEQ から派遣される方 (現時点で未定) によるものの合計 3 本の報告がなされます。先の 2 本はそれぞれ文学研究と映画研究の興味深い内容ですが、

特筆すべきは、2 本目の報告者が台湾の国立中央大学で修士課程を修了された台湾籍の方であるという点にあります。

Chun-Yi KUO 会員は、AIEQ の招聘を受けて 5 月にマギル大学で持たれた大会で報告された折に、同様の理由でそこにおられた佐々木菜緒会員と出会い、AJEQ のことを耳にされたとのこと。時を置かず AJEQ で報告できれば非常に嬉しいというメールが大会企画委員長に届き、AJEQ の会員になる意向もおありでしたので、大会企画委員会で自由論題の報告者として承認するという運びとなりました (Chun-Yi KUO 氏は 7 月 15 日の理事会で会員として認められました)。

AJEQ は AIEQ との緊密な協力関係を持ち、ACEQ とも親密な間柄であるため、すでに国際的な活動を積極的に行っていますが、今回海外からの自主的な報告者が得られたことから、国際化に向けてさらに歩みを進めたと言えます。今後こうした報告者がどの程度得られるのかは未知数ですが、海外から報告者を募るとするのはこれまでなかった視点ですので、今後こうした可能性も追求し、AJEQ の活動が広がって行ったらと思います。

以上述べましたように、今年度の大会にはいくつもの魅力的な点があり、これまでと一味違うものとなると思われますので、会員のみならず、多くの方々が集われる大会となることを切に願っています。

(2017 年度全国大会企画委員長)

<2016 年度小畑賞調査報告 1 >

ケベックのジャーナリズムとの出会い

松沼 美穂 (群馬大学)

小畑ケベック研究奨励賞を受けた研究プロジェクト「第一次世界大戦 100 周年を通して見たケベックの歴史的アイデンティティの表象と認識」を遂行するための現地調査は、2017 年 2 月 3 日から 23 日にかけて実施した。ご存じの向きもあるかもしれないが、ケベックにおいてこの大戦の集合的記憶は、死者まで出した徴兵制反対暴動に特化しており、それ以外の点は看過されてきたきらいがある。かつての交戦各国において世論、メディア、政府の関心を喚起している周年記念に際して、ケベックではどのような(無)反応がみられるかが観察対象である。今回の調査旅行の目的は、大戦 100 周年記念の実行に携わる関係者あるいはそれらについて発言する歴史研究者・教育者、メディア関係者、博物館学芸員、公共政策担当者などへのインタビューであった。

ケベックのことであるからお察しのようには、友人知人を介してのコンタクトは概して容易であり、快く申し出に応じてもらえたケースが大半であった。大学関係者との交流には慣れているが、メディア関係者との接触ははじめての経験であり、以下では主にこの点についてご報告したい。

ル・ドゥヴォワール紙のジャーナリストへのインタビューの可能性を研究協力者であるモンREAL 大学教授のカール・ブシャール (Carl Bouchard) 氏に相談したところ、

ジャン＝フランソワ・ナド (Jean-François Nadeau) 氏を紹介してくれた。後から理解したのだが、氏は同紙のジャーナリストとしてのみならず歴史家としても著名である。氏は直接明言はしないものの、すぐれて政治的な意味をもつメモレーションという行為が、現代ケベックにおいては、たぶんに排他的傾向を示す「ナショナリスト」の活動となっていることを批判的にみている様子が印象的であった。なお写真史の専門家でもあり、最新著はモンREAL 375 周年に合わせて出された *Les Montréalais : Portraits d'une histoire* (Éditions de l'Homme, 2017) である。日本の伝統絵画の遠近法が西洋の写真史におよぼした影響に興味を持ち来日を望んでいるということである。

ラジオ・カナダが 2014 年に放送した 5 回シリーズ番組 « 14-18 La Grande Guerre des Canadiens » を制作したリンダ・バリ (Lynda Baril) 氏に面会できたのは、すでに 4 年前から非常にお世話になっている、元防衛省歴史・遺産課課長で UQAM でも教えるセルジュ・ベルニエ (Serge Bernier) 氏のお陰であった。番組はラジオ・カナダがバリ氏に発注したもので、氏は、忘れられ埋もれていた大戦の個人史、いわば血の通ったパーソナル・ヒストリー、および女性の歴史を広く知らせたかったと強調した。なかでも大戦中に叔母が書いた書簡を保存していた女性との出会いが可能にした番組作りはとりわけ印象深かったそうである。番組は以下でアクセス可能である。

<http://ici.radio-canada.ca/premiere/premiereplus/histoire/112350/14-18nbsp-la-grande-guerre-des-canadiens>

バリ氏の紹介で大戦とは無関係だが、歴史番組 «Aujourd’hui l’histoire» の録音を見学させてもらった。ケベックに限定せず世界の諸国・諸地域の歴史から各回主題が選ばれ専門家が解説する。友人知人の反応を聞く限りでは番組は好評なようで、人々の歴史への興味のあらわれであろうか。

録音直前の数分の打ち合わせのみでリハーサルなどしないのに、内容および時間配分についてうまく収まることに感心した。ぼんやり見学していたら偶然にも、数日前に会ったナド氏が録音のために現れ、みんなどこかでつながっているような狭いケベック社会の特徴をみる思いがしたしだいである。

<http://ici.radio-canada.ca/premiere/emissions/Aujourd’hui-l-histoire>

ケベックでの豊かな経験を可能にしてくださった AIEQ ならびに AJEQ のご支援に心から感謝申し上げます。

<2016 年度小畑賞調査報告 2 >

出会いに支えられた研究滞在

関 未玲 (愛知大学)

2016 年度 AJEQ-AIEQ 小畑ケベック研究奨励賞を頂きまして、2017 年 3 月 11 日から 21 日までモンレアル大学にて、ジル・デ

ュピュイ教授のもと客員研究員としてキム・チュイ作品の研究調査を行ってまいりました。トロントでの乗り換えの際に、預けていたスーツケースの到着が間に合わないというハプニングから、数時間ほど残席のある便を待つことになったため、モンレアルのホテルに着いたのは、凍てつくような寒さに包まれた深夜零時近く。春も近づきつつあった日本を出発する時点では暖冬と聞いていたのですが、折しも到着日より再び厳しい冬が戻ってきたようで、早速マイナス 15 度の洗礼を浴びることになりました。

翌週月曜日にはデュピュイ教授の研究室を訪れ、キム・チュイ作品をめぐる近年の研究動向についてお話を伺うことができました。先生ご自身が収集された貴重な研究書や資料を閲覧させて頂けることになり、その後数日間モンレアル大学へ通ってはノートを取りながら論文を収集していきました。2009 年にレストランのオーナーや弁護士など様々な職業を経て 40 歳でデビューを果たした、作家としてはまだキャリアの浅いキム・チュイ作品については、昨今文



デュピュイ教授と

芸誌等の批評ではよく取り上げられているものの、研究書は二桁に満たない状況です。デュピュイ教授のおかげで日本ではすぐに入手できないような種々の研究論文に目を通すことができたのは大きな収穫でした。すでに 3 月中旬を迎えてはいましたが、終日零度を上回ることがなかったために不要の外出は諦め、同大学内にあるケベック文学・文化研究大学間共同センター(CRILCQ)、滞在ホテル近くのマギル大学図書館、「犬も歩けばスタバにあたる」と言えるほど店舗数の多いスターバックスをはしごしながら、論文を読み進める日々を過ごしました。

キム・チュイ作品についての個人的な研究と並行しながら、今滞在のもう一つの目的である共同研究を進めるべく、コレージュ・アユントゥシック所属のカロリーヌ・プルー氏とも議論の場を持ちました。プルー氏とは、2014 年に開催されたフランス人女性作家マルグリット・デュラスの国際学会で知己を得て以来、研究仲間として交流を深めてきました。精神分析的アプローチから文学研究を進めている彼女のケベッ



プルー氏と

ク文学史の講義にも参加し、ケベック現代文学を牽引する移民作家が、「祖国喪失」を起点としながらこの負の体験を克服することで「間文化性」という相対的な視点を構築していくさまを比較検証していくことを確認しました。プルー氏がレバノン出身のワジディ・ムアワッドの作品を取り上げ、筆者がボートピープルとしてケベックに渡ったチュイの作品分析を担当することで、ケベック文学史における現代移民作家の位置づけを改めて検証してゆければと思っています。

また滞在期間中にケベック市に赴き、AIEQ 事務所を訪問しました。この日は短時間のあいだに歴史に残る積雪量を記録した一日となり、ウデ事務局長と 8 階のオフィスにて歓談している間にも、ぼたん雪が乱舞する街はすでに白一色に包まれていました。日本のフランス語圏文学研究者の関心がケベック人作家に注がれている近況を報告し、自身もキム・チュイを軸とする移民作家を中心にケベック文学研究に邁進



ウデ AIEQ 事務局長と



AIEQ のスタッフ、ポリュー氏と

することを約束して、AIEQ 事務所の置かれたケベック会議センタービルを後にする頃には、帰路の景色はすっかり様変わりしていました。事務局長就任前は各国に赴任されていたというウデ氏の貴重な異文化体験の数々をお聞きした後だったことも手伝い、別世界に降り立ってしまったような錯覚を覚えました。

帰宅前にスタッフのポリューさんから住所を頂き、静かな革命の後に役目を終えたというカトリック教会を改築した図書館 *Maison de la littérature* へ立ち寄りしました。屋外の光が内部に余すことなく取り込まれるよう計算された旧教会の建物は日没時まで明るく、棚に開架式で並べられた移民作家の小作品を読み比べていると時が経つのを忘れてしまいます。

最終日には短時間ながらキム・チュイ氏へインタビューする機会にも恵まれました。前日にヨーロッパでの講演から戻られたばかりのチュイ氏でしたが、筆者の作品分析にも耳を傾けてくださり、「私は自分の描く登場人物に感情移入することがないので、私の作品に対する解釈を聞くことに興味があります。様々な読みに対して小説は開か

れているべきだと思うのです」と語ってくれました。また「私には母と父と兄弟さえいれば、良かった。祖国を出て何も持たないカナダにやってきましたが、私は幸せそのものでした」とおっしゃった言葉が心に響きました。昨年 10 月に AJEQ の年次大会講演で私たちを魅了してやまなかったチュイ氏の人柄に、再び感銘を受けたひと時でした。

多くの方に支えられ今回のケベック滞在が充実した日々となったことに感謝し、今秋 10 月に行われる大会で、研究の成果を報告できるよう現在準備を進めております。

<リレー連載「ケベックと私」第 4 回> ケベックのコンテンポラリーダンス

岡見 さえ (上智大学)

ケベックへの私の興味は、コンテンポラリーダンスがきっかけだった。最初は、エドゥワール・ロックが芸術監督を務めたダンスカンパニー、ラ・ラ・ラ・ヒューマンステップス。ライブ演奏と切り結ぶダンスのスリル、速度とリスクを追求した身体のヴィルチュオーズ、独特の耽美な世界。80 年代に彗星のように現れて以来、狭いダンスの枠組を越えて同時代のファッションや音楽、空気に反応し、再定義されつつあった男女の身体を視覚化するその作品は刺激的だった。

その後、衝撃を受けたのはマリー・シュイナールの仕事だった。象徴的な装身具をつけた半裸の身体、奇矯な叫び、ギクシャ

クとした動き。アルカイックだが未来的な雰囲気もある作品は、ロックの対極に位置づけることもできるだろう。ロックの振付が、社会的、文化的コードによって形成されたダンスとダンサーの身体に対する眼差し、性のステレオタイプを挑発し、攪乱し、未知の美を提示するのであれば、シュイナールの作品は、それらのコードが誕生する以前の無垢な精神と身体からもう一度はじめようとするかのようだ。フランスは視覚的かつ哲学的、ドイツは演劇的等、コンテンポラリーダンスには国によって特徴があるが、人間の存在の深い部分から出発し、振付家ごとに独創的な作品を生むケベックのダンスの魅力には抗いがたかった。

彼らの作品に出会ってから数年後、幸運にも振付家と直接に話をする機会を得た。2013 年夏に調査に赴いたウィーンの国際ダンスフェスティバル、イムプルスタントでシュイナールは『アンリ・ミショーのムーヴマン』と『ジムノペティ』を同時上演していた(『アンリ・ミショーのムーヴマン』は、日本でも 2015 年に上演された)。ミショーの同名詩に基づく本作にちなんで文学と身体性について聞くと、詩とは音声のオブジェであり、身体と呼吸、声は一つの繋がりであるゆえ、身体と詩は結びつくという答えが返ってきて、シュイナールの作品でしばしばダンサーが発する、言葉にならない叫びの謎が解けた気がした。続けてダンスを始めた理由を聞くと、次のような答えが返ってきた。「それは私に身体があるから。

身体がなければ、私は存在しないから」即座に意味がつかめず、重ねて質問した。「そう考えていたのは小さい頃から？」

「いいえ。小さい頃の私は身体を持っていなかった」やはりわからず、“身体を持った”のはいつかと尋ねた。するとそれは水中でのことだったという。「私が身体を持ったのは、泳ぎを習い、水中で呼吸を意識したときでした。息から生まれるあぶくの音、呼吸の音…。私が身体を持ったのはそのときです。12 歳か 13 歳の頃でした」さらにほどなく、学校の教室に一人座っている少女を見たとき、その存在感に突如として圧倒された。「このクラスメイトは自分の身体を認識している一彼女が身体を持っていることを私は突然理解しました。それまで自分の身体を明確に意識している人に会ったことがなかった私は、完全に魅惑されたのです。それは一つの啓示でした。そして私は、自分自身の身体の探求を始めたのです」

この話から思い出したのが、2008 年、『アムジャッド』公演の際、彩の国さいたま芸術劇場で取材通訳として接したロックの言葉だった。すでにダンサーとしての活動を終え振付に専念していた時期で、若き日の鋭く張り詰めた雰囲気は和らいでいたが、低く響く声、深い色の瞳、そこに絶えずよぎる鋭い光が印象的だった。寡黙だが、仕事以外の個人的な事象に関わる質問にも丁寧に質問に答え、取材のインタビューの外では驚くほど気さくな人だった。『白鳥の湖』『眠れる森の美女』という、19 世紀末のロ

シアで生まれたクラシック・バレエの金字塔とも言える作品の引用と再解釈の仕事であるこの作品に、振付家は「アムジャッド」という男性にも女性にも用いられるアラブの名を与え、厳格なモラルを規定した 19 世紀西洋の幻想のトポスであったオリエントに代表されるバレエの「外」の世界を暗示し、伝統の技術を解体し再構築する振付がダンスに妖しい魅力を与えていた。カサブランカに生まれ、2 歳半のときに家族とカナダに移り住んだロックだが、作品にその出自にまつわる要素を入れることは稀であり、興味を惹かれてカナダに来た頃の思い出を尋ねた。すると、まだカナダに着いて間もない頃、地域の集まりがダンス・パーティになり、興に乗った母親も輪に入って踊り出したが、それが他の人たちとは違うモロッコの踊りで、子供心に恥ずかしかったのをよく覚えている、というエピソードを語ってくれた。そしてロックは、「それが初めてダンスを意識した時だったのかもしれない」と、悪戯っぽく付け加えた。

二人の振付家ともに、その出発点にバレエやモダンといった既存のダンスへの興味、演目やスターダンサーへの憧れではなく、幼い日の体験や他者のまなざしによる身体像の認識の記憶を語り、ある場所にいわば偶然に存在する「わたし」の身体をさまざまな外的条件から分析し、新しい表現に昇華させていることが、私には興味深い符合のように思われた。この独特な身体の探求に基づく彼らの作品は、視覚的な美しさを

追求してもただの美しい絵にとどまらない。ダンサーの動く身体はそれを見る者の心を動かし、そのうえ場面が喚起する緊張や笑いや驚きは観客の呼吸を変え、身体感覚にも働きかける。ケベックのダンスを見ることは、傍観者であることをやめ、作品が投げかける真摯な問いに存在のすべてで向き合う強烈な経験だ。そしてそれは、他のダンスでは得られない余韻を残すのである。

●編集後記●

先日、モンREAL出身の元宇宙飛行士 Julie Payette さんが次期カナダ総督に就任することが発表されました。慣例どおりフランス語話者の就任ですが、報道によれば彼女は6つの言語をあやつるのだそうです。就任は秋ですが、新しい Son Excellence の活動が注目されます。全国大会でお会いしましょう！(T)

日本ケベック学会 (2017 年 7 月現在)

●主要役員

立花英裕 (会長)
伊達聖伸 (副会長)
丹羽 卓 (副会長)
矢頭典枝 (副会長)
小倉和子 (顧問)
C・ドゥロンジェ

(顧問、ケベック州
政府在日事務所代表)

●広報委員

大石太郎
丹羽 卓
片山幹生
杉原賢彦
S・コルベイユ
小松祐子

AJEQ ニュースレター

年 3 回発行

発行人：立花英裕 編集人：大石太郎